

「盗られない下着」

作 佐藤慎哉

【シーン1】（朝）

〈カット1〉ベランダ

朝、鳥のさえずり。

ピンチハンガーにかかった、パンツとブラジャーの画。

〈カット2〉ベランダ（大迫アップ）

大迫の悲しそうな顔。

（大迫）

「今日も盗まれてない。」

【シーン2】

〈カット1〉（文字）

「数日前」

【シーン3】（昼）

〈カット1〉テーブルの前（テーブル側から撮影）

大迫が慌てて部屋に入ってくる。

服装は軽くよそ行きという装い。

片手には新聞紙で花束のように包装されたレースフラワー。反

対の手には白い手紙のようなものを持っている。（手紙は各部屋

の郵便受けに入れられた大家さんからのA4の手紙）

大迫は花をテーブルの上に置き、その手紙を神妙な面持ちで読

んでいる。

（大迫）

「ついにうちのアパートにも下着泥棒が出た。

最近この町で多発している下着が盗まれるという事件。おそらくその犯

人がうちのアパートにも来たのだ。大家さんに確認すると被害にあった

のは私の隣の部屋の女性。ベランダに干していた下着を数枚盗まれたら

しい。どうして・・・どうして・・・

〈カット2〉テーブル前

大迫手紙から顔を上げる。

私じゃないんだ。

どうして私じゃないんだ。どうして私じゃなくて隣の部屋なんだ。どうして私の下着じゃないんだ！

やっぱり私は普通じゃないのか！

・・ずっと普通の女の子に憧れてきた。

小さい頃から個性的と言われ、いいねと言われてきたけど、個性的で良かったことなんて、一度もなかった！

小学校では個性的で目立つという理由で、なりたくもないあらゆる役職をやらされ、中学校では個性的で粋がついているという理由でいじめられ、高校では個性的で鼻につくという理由で先輩に目をつけられた。

大人になっても反りが合わないバイトのシフトを外され、独特な雰囲気があつて無理と好き人にふられた。

個性的で良かったことなんて一度もない！

努力だつてした！その時々流行った量産型の服装と髪型をしてきた。でも！私がやると個性的と言われる。なんで！

私も普通の女の子になりたいのに！

被害にあつた女性達がテレビのインタビュウを受けてた。モザイクがかつてたけど、みんな大人しそうな、普通の女の子ぽかつた！犯人はきっとそういう女の子を狙ってるんだ！

普通の女の子になりたい。個性的じゃなくていいんだ。(花を持ってみながら) この花みたいに、周りを引き立てるその他一般の女でいいんだ。

〈カット3〉レースフラワーと大迫のアップ

レースフラワー。こんな花聞いたこともなかった。

久しぶりに会った高校時代の担任の先生が、行方不明になったタイムカプセル探しを手伝ったお礼にと、花壇に咲く花を何本か分けてくれた。

先生がいうには他の花を引き立てるためによく使われる花らしい。私もそんな風に目立たず他を引き立てる人間に生まれたかった。

先生。

先生は、個性的なところが私のいいところ、好きなのところだと言ってくれた。だから私は今までやってこれた。でももう無理です。

認められたい。私も普通の女の子として認められたい！

盗まれたい。私も下着盗まれたい！

【シーン4】(数日後)

〈カット1〉ベランダ【シーン1】と同じカット)

朝、鳥のさえずり。

ピンチハンガーにかかった、パンツとブラジャーの画。

〈カット2〉ベランダ【シーン1】と同じカットからの続き)

大迫の悲しそうな顔。

(大迫)

「今日も盗まれてない。」

大迫手紙を(大家の手紙)出して。(画角外から出す)

(大迫)

「なのに・・・なのになんでえ反対隣の女の下着が盗まれるんだヨォ!!
なんで一個飛ばしたあ!(手で棒を作って)ここ来たら、ここ来て、こ
こだろう!順番があるだろう!!くそー!!どうして私を飛ばした
ー!!私がやっぱり私が普通じゃないからか。
いや、気付いてないのか!私の存在に気づいてないのか!・・・気がつか
せてやる。私の存在に気がつかせてやるよう!」

【シーン5】(昼)

〈カット1〉窓辺

外から清楚な格好をした大迫が帰ってくる。

(爽やかなワンピースか?)

窓辺から顔を出し、その後、窓の外を意識しながら軽く踊る。

(大迫)

「止まって)よしこれくらいいいだろう。機は熟した。

ここ一週間、女の子らしい爽やかな服を着て意味もなく近所を出歩き、
部屋ではなるべくカーテンを閉めず窓辺で過ごした。一人暮らしの普通
の女がここにもいることをアピールしてきた。

下着もなるべく外に干し、隙を見せた。

どうだ、泥棒。どうだ、泥棒。私の存在に気づき、盗みたくなってきた
だろう。」

〈カット2〉ベランダ(パンツとブラジャーと大迫の画)

ベランダのピンチハンガーにパンツが干してある。

(大迫)

「来い。来い、いつでも来い!」

【シーン6】(夜)

〈カット1〉ベット

夜。ベットに横になっている大迫。
顔のアップ。
外から物音がする(編集でお願いします・・・)

(大迫)

「(急に目を開けて) 来た。来た来た来たー！間違いない。外で物音がする。誰かがベランダに来ている。いいぞ、盗め！盗め！私のパンツを盗め！」

そうだ、それでいい、それでいいんだ。ここには普通の女の子がいる。盗むべき下着がそこにあるんだ！持ってけ泥棒！」

【シーン7】(朝)

〈カット1〉ベランダ

朝、鳥のさえずり。

ピンチハンガーにかかった、パンツとブラジャーの画。

それぞれ片方の洗濯バサミが外されているが盗まれてはいない。

〈カット2〉窓辺の大迫(窓側から撮影)

衝撃の顔を見せる大迫。

(大迫)

「なぜうえだ！なぜここまでして盗まない！片っほ外してるじゃないか！手かけてるじゃないか！なぜそこまでして取らない！なぜ！踏み止まった！」

許せん、許せんおのれ泥棒！そこまでして私に个性的というレッテルを貼りたいか・・・盗ませてやる、盗ませてやるからな。絶対パンツ盗ませてやるからな！」

大迫は画面から消える。

(大迫)

「それから私は下着泥棒がどんな普通のタイプの子を狙っているのかを把握するため、泥棒の後を追った。被害にあった女性を突き止めインターネット、泥棒の行動範囲も正確に把握し、ついに犯人の全貌を捕らえかけたその時だった。」

【シーン8】

〈カット1〉テーブル前

新聞を読んでいる大迫。

（大迫）

「じ、自首しやがった・・・な、なぜそんなことを。犯人の供述はこうだ。」

ずっと誰かに後を付けられている。もう逃げ切れないと思った。だ、誰だそんなに犯人を追い詰めたのは・・・、何してくれてんだ。犯人も犯人だ。何、ひ弱になってやがる。まだ！盗むべきパンツがあるだろ！（新聞から顔を上げる。）どんな顔してやがる、どんな顔してやがる犯人！（新聞を再び見る。）（表情が変わって）・・・せ、先生・・・。」

大迫

「個性的なところ好きだったんじゃないかい！」

〈カット2〉ベランダ

ピンチハンガーにかかった、パンツとブラジャーの画。そして一緒に逆さまに干されたレースフラワーが風に揺れている。

（ドライフラワーにしようとしている。）

（大迫）

「先生。教子のパンツだから盗めなかっただけですよね。」

おわり。